明治廿六年度

木村九蔵氏養蜂傳習場春蜂白玉飼育表

200890
J39

競進社長木村九藏先生閲
競進社卒業生中村高樹筆記

木村九藏氏
養蠶傳習場

春蠶白玉飼育表

K635
I39

緒言

吾競進社長木村九藏氏は慶應三年を以て養蠶業を創始し爾來年々斯業を研究練磨す明治七年に至り其養法の傳習を乞ふもの續出す依て氏は明治十年競進組を埼玉縣武藏國兒玉郡青柳村大字新宿に興し組員を結合して專ら飼育の改良蠶種の鑑別及其貯藏催青の法より上簇殺蛹の術桑樹の撰擇に至るまで周く研究し年々自ら品評會を開設し組員之成繭を蒐集し彼是の優劣を審判して之れか奬勵をなし明治十七年規模を宏大にし組織を革めて競進社となし氏之れが社長たり仝年當郡兒玉町に本社の事務及養蠶傳習所を併立し青柳村に青柳傳習所を設く后又第一支部を茨城縣西茨城郡に第二支部を當縣北足立郡に第三支部を當縣高麗郡に第四支部を群馬縣西群馬郡に置き

各支部共に傳習所を設け生徒を養成す爾來本社の養法を賛助し加盟合同するもの日に增し月に嵩み生徒を志願するもの年々歲々其多きを加ふ即ち容れて薫陶教導し熟練の者は擧げて教授員となし各地に派遣して改良養法の普及を計る明治廿二年氏命を奉じて歐州に渡航し廣く伊佛の蠶況を探撿し彼我を對照し優劣を取捨し飼養其他愈々正を得教授の方法序ありて愈々密なり明治廿三年第三回内國勸業博覽會に於て本社出品之白玉繭種共に進歩壹等賞を得たり氏夙に本邦蠶種貯藏法の不完全なるを痛歎して措かず茲に伊佛の實況を視一層其必要を感し明治廿四年當郡本庄町に日本蠶種貯藏會社を起し以て公衆の蠶種貯藏委托を受け完全に保護して尙蠶業の改良を計る今や本社盟合加員のもの二府三十九縣に跨り社員の總數算して方に八千

有餘名に達し養法殆んと全國に洽し明治十年以來養成之生徒五百餘名門下擧用の教授員二百五十餘名に及ふ當時尙同盟次第に加はり改良養法愈々波及し益々隆盛に趨くを見る予生を石洲津和野の山間に享け蠶業に志あり然れとも地方に於ては斯業尙未た進ます徒に舊慣を墨守し師の就くべきなく養法の見るべきなきを嘆ず偶々本社の高聲を耳にするや欣慕措く不能三百の行程遠しとせす明治廿四年鄕を辭し來て生徒となり教を門下に乞ひ斯業に從事す茲に本年養蠶飼育之概要を略記し騰寫の勞を省き印刷に附して小冊子となし社長の閲を乞ひ同志に領たんとす然れとも予性魯鈍暗愚一丁字を辨せす故に綴文の脩飾をなさず字句の當否を正さす重複脫漏意味或は解し難からん讀者乞ふ之れを諒せよ

明治癸巳九月窓前之梧葉秋聲を告ぐるの時

於武陽青柳村競進社筆記者誌

木村九藏氏養蚕傳習場

明治廿六年度春蚕白玉飼育日表

目次

第一　飼育受持主任及生徒姓名　一頁
第二　桑樹開葉の摸樣　六
第三　蠶室位置及構造　六
第四　蠶室雨戸高窓氣管其他取扱　一〇
第五　原種の由來　一一
第六　蚕種の保護　一二
第七　蠶種催青　一四
第八　掃立法　一五
第九　炭火利用法　一七
第十　養蚕用器具　二〇
第十一　殺蛹器及殺蛹法　二三

目次畢

第十二　催青期　二九
第十三　育養期　三七
第十四　上簇期　七一
第十五　附記　七五

本年の飼育ハ蠶室(瓦葺平屋)及居宅(茅葺二階造)並に附属室(板葺二階造)の三室に於て之を行ひ其掃立蠶種總蟻量七十五匁四分五厘八毛にして内白玉種六十八匁四分一厘赤熟種二匁六分九厘八毛白姫四匁三分五厘なりしも本表ハ蠶室に於て飼育せる白玉種蟻量四匁よ對し調査せしものなり

第一　飼育受持主任者及生徒姓名

教授　木村志滿
助教　吉澤清作

生徒

新潟縣西蒲原郡四個村大字牧ヶ花
四期生　樋口次郎
嶋根縣鹿足郡津和野町大字後田
三期生　中村高樹

仝上

仝上

仝上

二期生

仝上

仝上

仝上

群馬縣山田郡桐生町大字新宿　宮澤文三郎

埼玉縣北足立郡馬宮村大字西遊馬　木村忠次郎

仝縣秩父郡久那村　岩田丈五郎

仝縣那珂郡大澤村大字圓良田　野澤信太郎

茨城縣結城郡絹川村大字中　關根榮八郎

千葉縣千葉郡白井村大字中野　鈴木省三

香川縣高松市東濱町

仝上

一期生

仝上

仝上

仝上

仝上

仝上

群馬縣多胡郡吉井町　柴垣隆之助

仝縣邑樂郡多々良村大字高根　高橋盛太郎

仝縣北甘樂郡富岡町大字七日市　饗庭喜一郎

仝縣南勢多郡黑保根村大字宿巡り　保坂稚秀

仝縣仝郡粕川村大字深津　田沼貞作

仝縣邑樂郡梅島村大字梅原　中島菅次郎

高澤伊三郎

仝　仝　仝　仝　仝　仝
上　上　上　上　上　上

埼玉縣兒玉郡青柳村大字新宿　木村貞藏
仝縣秩父郡名栗村大字下名栗　鹽野又次郎
福井縣坂井郡坪江村大字中川　坪田瞭亮
仝縣仝郡仝村大字前谷　土屋榮次郎
愛知縣寶飯郡豊川村大字豊川　白井保之助
千葉縣山邊郡大和村大字小西　前田恒三郎
仝　所

仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝
上　上　上　上　上　上　上

江口榮吉
東京府西多摩郡成木村大字成木上分
野島龜藏
靜岡縣田方郡田中村大字白山堂
中島省一
群馬縣南勢多郡宮城村大字苗ヶ嶋
前原ツヂ
埼玉縣秩父郡下吉田村大字下吉田
齋藤ハル
佐賀縣東松浦郡唐津町大字魚屋町
奥村ミツ
埼玉縣兒玉郡本庄町
栗原ツヂ

千葉縣望陀郡小櫃村大字戸ヶ崎
宮崎エイ

第二　桑葉發芽の摸樣

本年當地方桑葉發芽の摸樣ハ其最初に於てハ昨年と比較し二三日を遲れたるを認む然れ共爾後の生長急進にして即ち掃立の當時に至りてハ昨年に比し其生長四五日間の早きを見るに至りたり即ち昨年四月九日調査せしもれと本年仝日とを比較するに桑芽の澎張摸樣本年度のもの二三日間遲れしが如しと雖も其后仝月十六日に至り調査せしもの客年ハ一枝條假令バ五十芽として其中綠色を含むもの十五六芽なりしも本年ハ既ヨ四十一二芽ヨ至り且少しく開綻せんとするものあるを認む仝月二十日に調査せしもの昨年ハ開葉せるもの僅少なりしも本年ハ既ヨ一二片開綻せるもの數芽あるを認む昨年は開葉の摸樣五月四五日頃の掃立ヨ適したりしも本年ハ仝月一二日れ掃立に適し即ち結局其開葉四五日の早きを見るに至りたり

第三　蠶室位置及構造

凡そ養蠶室ハ蠶兒を飼育するヨ備ふるもれなれば勉めて其構造ヨ注意し風雨霜露ハ勿論冷濕蒸熱等を巧みヨ避け加之空氣の流通をして適好ならしめ適當の温度を室内ヨ整ふるを得火力を利用するも炭酸瓦斯或ハ蒸熱の氣をーて籠らしめず即ち其外氣に對する用意と内部ヨ要する働と終始相俟て完全ヨ室内氣候の作爲をなし得らるゝを要す是の故に其構造に就て主とする所ハ氣候の關係に應すべき備をなし變動を來すの外氣ハ豫め避け得べく且空氣の側壓或は上散自在ヨして其新陳代謝宜しく蚕兒の衛生に適する樣構造するヨ外ならず今玆ヨ飼育したる蠶室の概畧を述ぶること左の如し

蠶室の位置ハ埼玉縣武藏國兒玉郡青柳村大字新宿競進社境内ヨして地形最も高燥開豁南ハ三町許にして小山を連ね西ハ一里餘にして連綿ヨる山丘を横ふ北より東に亘りては渺茫たる平原なり西方僅數町にして神流川れ一帶北ヨ向て奔流す其養蠶ヨ適する推ヨて知るへし今蠶室れ構造を略記すれば間口九間奥行三間六分六厘高さ一丈五尺四寸の平屋造瓦葺ヨして三室連接す飼育場は（東西北の廊下は各三尺）（宛南方ハ四尺を除き）即ち之れ

を三室に區劃し一室の間口二間六分六厘奥行二間半東西の兩外面ハ土壁にして南北ハ廊下外に戸障子を箝む其障子上ハ戸袋上を除くの外ハ悉く欄間を設く床下二尺又土壁よして各室二條（南北四條）宛の氣管（經四寸）を通じ快晴の日ハ開放して以て床下空氣の交代及其乾燥を計る南北廊下の左右よハ東西對面に開き戸四個を設け其開き戸より間隙三尺を置きて内よ障子を引くこと四ヶ所共に仝し此障子ハ常よ開き置くと雖とも開き戸を明け室内よ空氣を入るゝよ當て此障子の開閉を加減し外氣の過剰或ハ急劇に浸入せざる樣斟酌と加へ以て室内暑熱を防くに用ゆ東西の兩室は板壁を以て東西の廊下と界し各室東西對面に四尺の蠶籠を配置す蠶籠の兩側又巾四尺の板壁を以て室と廊下との境と限る該板壁の下部に四寸の腰欄間を置く板壁と板壁との中間八尺のヶ所は南北とも障子を引く之を半壁半口と云ふ其南北板壁及障子鴨居の上にも欄間と設け各室は共よ障子を以て界を分つ又各室其中央に三尺四面の空所を設け蓋をなし以て床下よ火鉢を入るゝの便とおす此火鉢と利用して床下と乾燥ならしむ其両側一尺を隔てゝ巾仝じく三尺長さ四尺五寸の火炉を設け各火炉共其中央に近き

三尺四面を埋火の個所となし餘の一尺五寸を空所となし其空所よ灰の入らさる樣小高き境をなし其三尺四面の個所ハ上に厚板の蓋をなし爾餘の一尺五寸空所上ハ格子を箝め以て其間隙より火氣の洩散するよ供す而して其床板より天井よ至るの高さハ八尺三寸五分にして各障子板壁の丈ハ總て五尺八寸なりとす天井ハ巾二寸板の貫子にて二寸透しよ張りたるものにして之れを小間返しと云ふ此上よは常よ筵一重を布き置き塞冷なる日に當てハ重ねて二枚となし温暖の時に向てハ又一重となし或ハ全く剝去る等其重剝に注意して氣候作爲をなし三眠後ハ蠶籠の上を除くの外ハ室内温度れ維持し得らるゝ限りは之れを剝き置くと多し而して各室屋上に高窓各一個を設て以て排氣に備ふ高窓東西の兩面は土壁を以て塗り間口四尺奥行三尺（但し内法）にして南北開閉戸を設く開閉戸ハ唇板よて之れに繩を附し曳きて室内よ垂る之を張弛して開閉自在なり其丈一尺三寸五分開閉戸の下に又蹴込み板を設く其丈八寸之れ又開閉自由なり是等を開閉して又室内氣候の作爲に供し主として腐隙の氣を排出せしむ小間返し天井より桁上に至る迄の高さハ五尺〇五分よして其桁下一室毎よ丈一尺の欄

間四個を備へ同しく暑熱の際取外し以て清涼を求むるに備ふ

第四　蠶室雨戸高窓氣管及二重障子の取扱

蠶室南北の雨戸ハ朝に開き夕ヨ閉ずると雖とも快晴なる日ハ早く冷濕なる日ハ遲く開き又風雨の烈敷き時ハ之を閉ぢ夕陽の射照する時も亦之を閉ぢて遮斷す然れとも此くの如き場合ヨ於てハ南北共ヨ全閉すること稀なりとす即ち風雨南方より起れば南方を閉ぢ北方ハ開き置き之れに反するときハ南方を開く〔南北何れを閉するとするも一尺置或ハ二尺置の細目ヨ閉すること〕場合に依り斟酌あり〕高窓は快晴無風の日室内温度の維持敷得らるゝ限りハ大概之を半開或ハ全開にす然れとも夜中ハ之れを半開のまゝ置くか或ハ全く閉ずることあり三眠後ハ概して之れを全閉することなし〔但敷風雨烈しき時ハ例外とす〕又室内炎熱の時ハ高窓の蹴込みをも開放す床下氣管ハ室内温度上昇に際し快晴無風の日は其蓋を開て外氣を床下より室内に浸入せしめ以て清涼を求め濕潤或ハ雨天の日ハ之を開くことなし南北廊下内外二重障子の取扱ハ又室内温度の維持し得らるゝ限りハ稚蠶飼育中と雖へとも内障子は常ヨ開放し置き外障子のみヨて飼育するを良敷とす尤も室内温度下

降するヨ當ては内障子をも閉ずるを要す然れとも三眠後は無論内障子ハ取外し外障子れみにて飼育すべし

以上の取扱ハ炭火利用と相俟ちて室内氣候作爲上須臾も油斷すべからざる務めなして外氣の如何に應し臨機の取扱をなすへし飼育中此取扱ハ日夜絶へず行ふと雖とも其取扱繁雜なるを以て本表中省畧せ敷こと尠なからざれハ宜敷く推知すべし

第五　原種の由來

原種ハ白玉種にして今其由來を尋ぬるヨ吾社長夙ヨ吾邦蠶種は雜駁混交し製種家ハ各自其好む處に從て徒らに其名稱を下し區々頻々玉石混交何れを佳とし何れを否なりと判明し難きを憂へ其異種不良のものを斥け好種類を撰定せんことヨ汲々して未だ得ず日夜焦慮する所なりしが後竟ヨ往て群馬縣東群馬郡前橋町勝山宗三郎氏を訪へり前橋の地たる全國繭絲の一大市場と稱し勝山氏は豪商を以て專ら製絲業を取り夙に繭絲改良ヨ功勞あり内外産繭の鑑識其巧みなること海外無双と云ふ氏に就き懷抱の意見を吐露し好種類の撰定を期するの要を述べしヨ勝山氏既に持する所の意と

暗合せり加之氏は已に數年以來辛苦撰萃したる蠶種を數回他に飼育せしめ經驗頗る存ずるを聞き勝山氏の遠識に服せり勝山氏其同感の志あるを喜ひ爲めに經驗を經たる蠶種一枚を賜れりと云ふ其種類を問ひしに勝山氏笑て答へさりしと明治十三年此種を飼育せゝに頗る好結果と得色澤形狀品位最も佳にゝて大なゝず小ならず殆んと又昔小石丸の中間に居れり其成繭の純白雪の如きと之を掌中の玉と愛重するの意を寓ゝ白玉新撰と命名す以來白玉の名四方に轟き之れと復製するもの近來各府縣に起れり爾後年々之れが飼育に注意し繭に於て撰び又蛾に於て擇び之れか製種となし肉眼鑑定を遂げ翌年の飼育に當つ明治十八年以來一蛾撰框製種となし顯微鏡的檢査を遂げ病毒れ存するものゝ除去ゝ一層肉眼れ鑑定に注意し明治廿二年本社長伊佛兩國の蠶業巡視歸朝以來益々其撰繭撰種に注意し本年に至る迄年々此種を飼育す即ち明治廿三年第三回內國勸業博覽會に於て競進社より出品したる蔵種共に進歩一等賞を得たる白玉種是れなり

第六　蠶種の保護

蠶卵孵化の當時より冬季貯藏入庫の日までの取扱ひを第一期の取扱と云ひ貯藏庫入庫より出庫の日までを第二期の取扱ひと云ひ出庫して催青するを第三期の取扱ひと云ふ世の人多くは蠶兒の飼育に間斷なく注意すると雖とも其護種の法に至ては之を等閑に附し恬として顧みず往々之れか爲めに失敗を招くものあり是れ最も歎すべきの極なりとす抑も護種ハ養蠶の本にして飼育ハ末なり其本を顧みすして如何に其末を勉むるも得て好結果を望むべからざるゝ明鏡を看るより明なり即ち護種中に在りてハ温度の變動及び濕氣を虞るゝ故に之れを温度の激變なき濕害の患なき場所に於て保護せさるべからす本年飼育の白玉種ゝ之れと當郡本庄町日本蠶種貯藏會社に於て第一期より第二期の取扱ひを終りたるものなり其第一期は第一期取扱室に於て之を保護す其取扱中の温度は親蛾產卵の當時は七十四五度以下ならしめす之れを繼續して八月を了り九月は六十八度十月は六十四度十一月ハ五十九度十二月は五十五度の標準に依り寒濕なる日に於てハ絶へず火力を利用し寒氣の防禦と濕氣の除去とに注意し一月に至り第二期の扱即ち入庫に至るまでハ決して五十度以下の寒氣に感せしめ

ず大寒前（本年は一月十五日より入庫せり）に至ると始めて蠶種を第二期即貯藏庫内より移す該庫は其構造緻密にして多くは不導体を以て其周圍を構成し庫内より暖氣の浸入と防ぎ且つ木炭石灰を利用して濕氣の防禦に供し氣管を備へて空氣の流通を司らしめ排氣管を建て陳氣の排出をなさしめ氷室と設け鉄管を通じ庫内温度の上昇を防ぎ以て終始四十度以下三十六度迄の寒氣を庫内に作爲し常に防濕と昇温とに注意し春分後より至り四五度を昇せて四十一度を以て出庫し第三期（本年は四月十八日に出庫す貯藏日數九十四日間）に達し庫内より取出し以て催青の扱ひに移る

第七　蠶種催青法及催青中温度の豫定

蠶種を催青室より移すの以前より於て煤掃となし清潔に洒掃を行ひ之れより移さんとする五六日前其室内火炉及び床下等に兩三日間充分炭火を用ひて飽まで乾燥せしめ後快晴よして乾燥の日に當り日中戸障子を不殘開放し外氣の流通を求め火熱を去らしめ室内に適好の温度を作爲し其用意既に整ひたるとき則ち蠶種を催青器に收め室内より移し以て催青より着手す爾後三日間は火熱を用ひず三日目午後六時頃より至り初めて炭火を用ゆるに至るべき樣豫て室内氣候作爲に注意すべし然して催青中尤も注意すべきの要點い例令ば毎日一度宛温度を昇進せしむるとせば其昇せたる温度よりい決して再び下降せさる樣勉むべきと又濕氣れ過剩を恐るゝよあり以上の注意をなすまい必ず火力を豫備して室内氣候を作爲するよあり今左より本年催青に先ち其温度の豫定を設く

催青初日	五十五度乃至六十度	二日目	六十一度
三日目	六十二度	四日目	六十三度
五日目	六十四度	六日目	六十五度
七日目	六十六度	八日目	六十七度
九日目	六十八度	十日目	六十九度
十一日目	七十度	十二日目	七十一度
十三日目	七十二度	十四日目	七十三度にて發生を見るの豫定

掃立は先ち蠶卵紙を包むに其發蟻となして這ひ散らしめさるを爲めなり（蠶卵紙包入時期に午前四時を宜しとす）其包方に掃立紙を折合せ中に蠶卵紙を狹み前後と横の三方に四五分の弛みを置き裏面は折返し原紙面を上に向け籠に載せ之れを蠶棚目通り位の所に差し置く而して掃立を期する時間は先ち凡そ十五分間位前包み紙を開き其儘又据へ置く該時間中發蟻に室内恰好の温度に浴し擧止活潑の觀を呈す此時（大概午前十二時より正午迄）掃立に着手す其法先づ左右の中指頭にて原紙の兩端を抑へ鄭重に包紙の上より持上げ左の中指を兼て蠶種の裏面に附けある紙縷の間に指し入れ原紙を掃立裝置の粟糠面（蠶籠に筵を布きその）れは粃糠五升許り（一坪五合れ割）を平散し板にて水平に抑へ隅て之れに掃立紙と敷き粟糠を薄く散布し蟻蠶掃立の備をなし置くを云ふ）に掲け少し斜になし右手に羽箒を取り手術を極めて先其原紙の下部半面を掃卸す之を掃くには羽箒の一端を（中央より先端を用ゐ）卵面に當て蟻の摩傷せざる樣言ふべからざる手術を盡し蟻を彈くが如く掃落して一順すれば蟻は糠面に散す之れが纏結せざる樣又薄く粟糠を散布し又一順すれば粟糠之れに從ふ二三順にして其下部半面を掃き盡せば更に紙を飜し未だ掃かざる半面を下に向け又前の手術に依り掃卸す此手術二三回にして原紙面を掃き卸し尚其端邊及裏面にある蟻をも掃落す毎一回掃卸し蟻れ纏結せざる爲め粟糠を振り掛け又掃きて又振り掛くること終始皆同じ爲めに用意の粟糠（粟糠は蟻量四匁に對し七合一勺五才平面尺方一坪に付一合三勺）に毎掃卸しの都度々々に振り盡して掃終るの割合にて最初蟻量を見積りと用意すと共に其剩餘を見ず（粟糠に能く洗滌し乾かして之を熬り薄蟹色となりたるもの）而して其原紙と秤り蟻量と算出し其發蟻に掃卸しある繼紙に第一隅を指頭に撮み擡げて微動せしめつゝ蟻と糠と能く混和する樣紙の中間に捲り寄せ更に他の一隅より又次の一隅より順次捲り集めて其粟糠に依て蟻れ吐絲を絶ち蟻と蟻と纏結せざる樣且つ蟻を傷けざる樣混和し了れば蟻を直に別籠に移す（別籠の裝置に掃立の時に仝し）之れを移すには先つ其蟻と糠と混和せるものを右手に羽箒を用ひ左手の掌に掬ひ取り後又右手に移して繼紙の周邊より中へ幾重にも振り込みつゝ厚薄なき樣豫定の坪數（蟻量一匁に對し一坪三合七勺五才）に擴くべし茲に於てか蠶坐初めて成る

第九　炭火利用法

炭火利用の要は第一蠶室内空氣の流通を宜しからしめ第二室内の濕氣を排除し第三

内氣の整温を補給するよあり人或い火力を用ゆるい單に低温を助くるのみにありと信し其利用法を誤り之れが爲めに往々失敗と招くに至るものあり勿論春蠶飼育にありてい其當初い外氣の温度は概ね六十度以下を示し終齡よ至るも尚ほ清涼に過くるの日ありて發育に適せさるの温度よ下ると往々あるものなれば充分火温の補給なかるべからずと云へとも濕氣を排除し空氣の流通を計るに又大よ與て力ありとす抑も炭火い養蠶に取りていい必要欠くべからさるものなりと雖とも其利用を誤れば却て大なる害を釀すものなり即ち炭火を利用せば之より發する炭酸瓦斯は蠶兒に甚しき有害のものなれば炭火を利用するよい其障害を避け氣狀汚物い室外よ排除すべき極めて綿密の注意を要せさるべからず能く之れが利用を誤らされば蠶座い常よ恰好の乾燥を保ち桑葉及其他より發する濕氣を排出飛散せしめ空氣能く循環し蠶兒の消化機力を助け食慾を増進して其生長頗る著玄今其用法を左に擧げん

先つ一室に要する木炭の質と量とを定めを長さ二寸許よ鉄鎚を以て打折玄室外よ於て之れを煽す其熾り工合の好度を見るよは火面僅に白灰の掛らんとするを認めば

急き火炉よ移すべし機早きに過くれば炭酸瓦斯過剰の虞あり遲きに失すれば火勢減却の嫌ひなき能いす宜しく好機を失はざる樣注意すべし此時室内い熾熱れ劇射を避けんが爲め豫め白布の幕を張り或は襖障子等を蠶棚前に立て蠶兒に熱氣の直射を遮斷し之れと仝時に天井筵高窓を開放し空氣の流通を迅速ならしむべし然らざれば埋火の手術を盡すの際温度激昇の恐あれはなり炉中の殘火は室外よて煽す炭火の稍熾りたりと認めば先づ板片よて其掛灰と剝き落し之れを長さ五尺許りの棍棒前端一尺許りに鉄葉を捲きたるものを突き立て殘火を四方へ掻き寄せ少しく中間を凹くならしめ此に新に炭火を持來り之れに移し器具と以て其具い棍棒と異なり其先端を廣く長六七寸巾四寸許厚さ一寸許其半面より先端に至るし恰も鋤の如くなし其廣き部分い に從ひ次第よ薄くし之れに鉄葉を捲纏したるもの炭火の周邊を輕く打ち固め間隙なき樣火炉の中央よ半圓形を作り巾四寸長さ六寸位の板片にて左右より灰を掛け上りて火頭六七寸を現いし軟質の木炭消し炭を云ふを火頭に加へ其熾るを待ちて又前後より灰を掛け火頭直經五六寸室内温度に依り廣狹あり の圓形を存し他い徐々に周圍れ根部より灰を掛け上りて其形摺鉢を倒立せしか如くなすべし消炭を火頭よ置く所以い火勢の急劇よ

散逸することなく徐々ょ間斷なく發温せしむるか爲めなり而して室内温度下降或ハ多濕若しくハ空氣鬱滯の時に當て火力を利用せんとするには其根部周邊の灰を薄くし益々下れば益々薄くすることあるも決して火面を現ゑ裸火となさゞる樣注意すべし此利用法ハ天井筵欄間高窓等と相俟て斟酌を加へ炭酸瓦斯及蒸熱の籠らさる樣注意すること肝要なり

第十　養蠶用器具

一　催青器

催青器ハ本社長が新案製出ょ係るもれにして其構造を畧記すれば其長さ一尺三寸六分許其巾九寸四分許（高さ隨意たるべし）にして其周圍ハ紙の一重張りにて圍繞し行燈の形をなせり其前面に插蓋を設け之れを拔きて蠶種を插入る此蓋又紙張なり内部ハ上下共ょ紙際を隔つる五六寸の所より平面に竹骨の棚を設け之れに蠶卵紙を插入す（大概十枚以下を容るゝよ）設く（該棚と棚との間隙ハ一寸宛とし插蓋にて口を閉ず催青中ハ毎日其蠶種を上下に插し換ふべし是れ發生に不同を來すを以てなり發生前に至り蠶卵ょ空氣の感觸滑かならんことを欲し其底面の紙に截目を附し以て其流通を便ならしむべし之れを蛻腹切と云ふ仝時に其側面れ上部にハ横に巾一寸位を截り去り窓を穿つ

二　桑篩

競進社用桑篩又社長の多年考案を凝し製出せしものにして其數十二種あり何れも竹製ょ之て皆六角目を以て成る即ち掃立より二眠起四回の給桑迄に使用す其要たる餌桑の斑掛けおきと勉むるにあり特ょ稚蠶の際ょありてハ剉桑頗る細小にして之れを指頭ょて與へんとするも五指の間より洩れ落つる剉桑斑掛なきを保し難し若ゑ誤て斑掛をなすに於てハ蠶坐の乾燥不平均ょゑて爲めに其蠶兒の發育生長ょ幾分の不同を來すべく然るときは眠起も又不齊ょして飼育に困難を覺もべし之れに由て給桑を均一平等ならしむるの工風を凝し之れが發明をなすょ至る

右十二種ハ順次蠶兒の發育するに從ひ其篩目の廣きに換へ剉桑の歩合に應ず其種別左の如し

一　一分五厘（六角目）　二　一分八厘（仝上）

三　二分一厘(全)　四　二分四厘(全)

五　二分七厘(全)　六　三分　(全)

七　三分五厘(全)　八　四分　(全)

九　四分五厘(全)　十　五分　(全)

十一　五分五厘(全)　十二　六分　(全)

三　蠶　籠

長さ四尺巾三尺二寸五分よして竹製のものを用ゐ

四　蠶　架

蠶籠を插すべき楷段十一あり架柱の丈七尺六寸五分床板より初階に至る五寸初楷より第二楷よ至る六寸以上順次一分宛を増し上楷の間隙七寸よ至りて止む

五　蠶　筵

經を麻絲一本縷とし藁を織りたる筵なり群馬縣碓氷郡秋間村より多く之れを製出す方言之れを皆川筵と云ふ

六　羽　箒

掃立及び裏扱或ハ蠶座の周圍を繕ふに用ふ羽の長さ一尺内外鷹の羽を以て作る硬よ過きず柔かに失せず掃立に際し蟻を傷くる等の憂なし

七　貯桑籠

縦四尺横三尺二寸五分深さ三四寸摘桑を貯へ貯藏場れ棚よ插し置くに用ゐ之れを方言はよ籠と云ふ

八　雜　具

桑切庖丁　俎　笊　木鉢　籠臺　箕　竹箸　尺度　驗温器

時計　乾濕計　鎌　風見　燈臺　手燈　粟糠篩　籾糠篩　茅網

其他普通養蠶家に用ふるものに異ならず

第十一　繭蛹燥殺器及燥殺法

繭蛹燥殺器は木製にして其丈四尺八寸二分横巾外法三尺方其底面を除くの外全体面ハ七八重の紙貼りしたるものなり器の上面中央に三寸方の氣拔窓を穿つ(開閉戸を附し自在に開

閉す（前面下部より二尺一寸（此間中央に六寸方の窓を設け開き）て火炉炭火れ摸様を見るに備ふ）上りたる所より上部に火除け蓋及繭箱を插入するの個所として巾二尺九寸丈二尺六寸二分の開閉戸を設く之れ又前同様紙貼りとす此開閉戸の中央に巾三寸丈五寸の小窓を穿ち之れ又開閉戸を附し寒暖計及繭蛹水分の存否を檢するに用も其内部の構造は下部二尺一寸上りたる所に火除け障子（紙一重貼り）を置く此間隙障子れ下部より第一楷棧の上面まで一寸五分を除き以上内部二尺五寸を十楷に區分し繭箱十個を插入すべし繭箱を受くる第一棧の上面より第二楷棧の上面に至る二寸五分内繭箱の高さ一寸八分間隙七分（内に三寸の棧木を含有す）なり十階皆同丈とす而丈て繭箱の巾に方二尺七寸八分五厘よし其中央縦に巾一寸の間隙を通して以て火氣の上騰循環に便ならしむ箱の底面に三寸厚れ棧を入れ上に障子を設け紙一重を貼り之れを底となす丈此上に繭を並列す其繭の容量に各箱に依て同丈からず即ち上下に在るものに多量を容れ中央に存するものに少量と置くことを左に示す如し

第一	生貫七百匁	第二	六百匁
第三	五百匁	第四	四百匁
第五	三百匁	第六	三百匁
第七	四百匁	第八	五百匁
第九	六百匁	第十	七百匁
計	五貫目		

前器一回燥殺量に生貫五貫目を定量とし（然れども時に或に一貫目位の増減あり）之れに應用する炭量二貫四百匁を定量とす其他丈燥殺繭一貫目を増減する毎に炭量も又百匁を増減す又火炉に土間へ縦一尺八寸横一尺二寸深さ三寸五分乃至四寸の穴を設け縦兩端中央に方二寸の突出口を穿ち空氣の流通を便ならしむ而して此炉に木炭を縦列に積み重ね兩端突出口より煽し始め全体熾き盡し方に白灰の火面に掛らんとするを度とし炭火の間隙なき様注意し火勢の減却せざる内急ぎ其薄灰を劇しく煽き去り直に其上に粳藁を拇指と中指とにて六握り乃至七握りを限り之れを十束に別ち炭火の方向に前後より交々一束つゝ平均に燃し藁の赤く燃へたるを度丈毎回霧吹きをなす藁火を黒く消し炭となすべし（其白色に消える（は瓦しからず）然して其藁炭に互に交叉して炭

火と密着せざるを要す已に用意の藁を燃し盡したる後突出口の片邊に三升入位の鐵瓶に八分通り水を盛りこれを掛け置くこれ蛹より水分の末だ發せざる前に於て火氣の直接繭に觸るゝと恐れ暫時間蒸氣と用ゐるなり而して後火炉周邊を掃除しこれに燥殺器（但し繭箱を插入せずして蓋のみをなしたる者）外箱を据へ凡そ十五分乃至二十五分間を經側面れ窓を開き藁灰れ瓦斯去りしを改め且つ鉄瓶中湯の沸騰加減を見計ひ好度と認むる時直に繭を盛りたる繭箱と插入して密閉し而して後蛹の死すると待て鉄瓶を炉の傍に取外ずし三時間を經て器内温度華氏百五十度より達し後又三時間を經て百六七十度に達せしめ第一回の燥殺を納る右終れば器械の儘炉の傍に轉置し上下二個所の窓口を開き繭の熱氣を徐々より減却せしめ凡卅分間を經て後繭を取出すなり爾後第二回の燥殺を四日目乃至五日目となし温度と百四五十度にして四五時間又第三回を十一日目乃至十二日目となし温度ゝ百二三十度よりして三四時間（尤も二回の燥殺にて繭蛹充分乾枯し少しも水分を止めざるに至らば第三回を行ふに不及）にて蛹より聊も水分を存せず杓子形に能く乾枯するに至り初めて燥殺を終る

因より誌す前記燥殺法ゝ唯其順序をのみ記載たるを以て實地之れを行いんとすときゝ或ゝ不明より苦しむの場合もあるべけれども詳細より之れを記載せんまゝ一二ページの能く盡す所よりあらざれば追て燥殺器精圖を添へ印刷に附するの計畫なるを以て此にゝ唯其概畧を述ぶるのみ

催青期								
日次／項目	月日	晴雨 朝晝	晴雨 夕	華氏寒暖 室內	華氏寒暖 室外	炭火用量		
一日	四月十八日	晴曇	晴	朝五六度 晝六五〇	朝四七度 晝七〇 夕六五			
二日	四月十九日	曇晴	全	全六六四	全七四五			
三日	四月二十日	晴	曇	全五九 全六三六	全四八 全七七五	午後六時 一貫目		
四日	四月廿一日	雨	全	全二 全六三	全二 全五七	一貫目		
五日	四月廿二日	晴	全	全三 全六五	全六 全七一	一貫目		
六日	四月廿三日	雨	全	全四 全六四	全五 全九五	一貫五百目		
七日	四月廿四日	雨	全	全五 全六六	全二 全一一	一貫五百目		

八日	四月廿五日	雨	仝	仝	仝
九日	四月廿六日	晴	仝	仝	仝
十日	四月廿七日	晴	仝	仝	仝
十一日	四月廿八日	晴	仝	仝	仝
十二日	四月廿九日	曇	晴	仝	仝
十三日	四月三十日	晴	仝	仝	仝

仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝

仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝

仝	仝	仝	仝	仝	仝
一貫五百目	一貫四百目	一貫八百目	一貫一百目	一貫一百目	一貫八百目

第十二　催青期

四月十八日　（催青第一日）

朝來晴天なりしが午前十一時頃より薄曇となり午後二時頃より追々晴れ三時快晴となれり當日い曾て本庄町日本蠶種貯藏會社貯藏庫内に貯藏しある蠶種を出庫し（蠶種は本年十一月十五日より入庫し本月十五日を以て出庫し貯藏日數九十日間の豫定なりしが桑葉開綻の模樣を見計ひ掛酌を加へ茲より出庫三日間と延長し當日より至り之れを出す）午後五時外温運搬に適せるを認め本社へ持來り兼て用意の催青器より收めこれを四月八日煤拂及び火炉の掃除となし爾後四月十四日より十五十六の三日間炭火を火炉及び床下火鉢等より用ひ室内を乾燥せしめ十七日より至り蠶室戸障子を開放し火温を去らしめ室内と適好の温度に作爲したる蠶室第三號より移し床板より三尺許上りたる處に安置す時より室内六十度なり午後七時北方雨戸を閉じ同八時南方を閉ず（雨戸い毎日凡そ午前五時前後に開き午後七八時より閉ず）夜十二時温度に由て以下此取扱を記せず

四月十九日　（催青二日目）

朝曇天なりしが午前二時温度と檢するに適度を保てり同十時頃より快晴となり室内

温度上昇せんとするを以て高窓を開き暫時にして天井筵中央を剝ぎ同十一時倚上らんとするを以て内障子を開く同時頃より西風強し午後二時頃より至りて止む仝八時頃より温度下降せんとするを以て天井筵其他を舊に復す本夜十二時又温度より異變なし

四月二十日　（催青三日目）

朝來晴天穩和なり午前九時頃より追々温度昇進せんとするを以て前日に如き取扱をなす正午より至り外氣の七十七度の高温に達し室内又隨て倚上昇せんことを恐れ氣管を外して清涼を求むる等室内氣候作爲に注意盡力せり午後三時東方の疾風あり曇天となる夜より入りての取扱前日より同し本日出庫の日より三日目豫期の如く午後六時初めて炭火一貫目と火炉及床下火鉢より分け埋む

四月廿一日　（催青四日目）

前夜來曇天なりしが午前二時頃より降雨始まる室内濕氣增嵩の虞あるを以て午前三時火炉炭火の掛灰を薄ふし火力を用ひ以て乾燥を求む日中平温午後五時又炭火一貫目と增埋す終日間斷なく降雨霏々たりしが爲め室内は專ら乾燥の手段を盡して怠ら

す午後十一時に至り雨漸く歇む

四月廿二日　（催青五日目）

朝來晴天靜穩なり日中温度昇進の見込あり午前七時高窓を開き火炉の掛灰を厚ふし發温を遲緩ならしむ正午より至り果して温度漸次上昇の姿あり依て氣管内障子を開くも勿論天井筵を掃ぎ二階欄間を外ずして清涼の手段を盡す午後五時欄間を箝む同六時頃より曇天となる同時殘火を撿し新より炭火一貫目を增埋す暫くよして高窓を閉ぢ天井筵を覆ふ

四月廿三日　（催青六日目）

午前二時頃より降雨始まり濕氣強く室内蒸熱の氣味あり依て同時火炉の掛灰を薄くし火力を利用し勉めて空氣の交替を計り之れが防禦に注意す午前十一時雨歇み暫時にして又降り時に歇み時より降り恰も秋天の如し然れとも室内は始終定温を保てり午后六時殘火を撿し新より一貫五百匁を埋め乾燥の手段を盡す午後十一時温度稍下降の傾あるを以て火炉炭火の掛灰を薄くす

四月廿四日　（催青七日目）

朝曇天午前二時東方の和風あり室内濕氣強く蒸熱の氣味あり午前五時高窓を半開に
し天井筵中間を少しく剝ぎ火力を利用し之れが防禦に注意す本日ハ定温六十五度ヨ
して漸々孵化の期に迫り蠶卵に空氣の感觸滑かならんことを欲し午前八時催青器底
面ヨ蛇腹切を行ひ且つ其側面上部に巾一寸許紙を切り去り横孔を穿つ同九時より降
雨又始まり午後六時雨歇む同時殘火を撿し炭火一貫五百目を増埋す同六時半に至り
晴天となり十時に至り又曇天となり同十一時に至り降雨す

四月廿五日　（催青八日目）

前夜來降雨尚歇まず室内濕氣強し午前三時火炉掛灰を薄ふし火力を籍り防濕の手段
を怠らず午前七時より雷鳴あり同八時ヨ至りて雨止み追々晴れ同九時全く晴天とな
れり暫くして又陰雲重疊現出する等天變實に極りなし午前十時半西方暴風を送る忽
ちにして大さ大豆粒の如き降雹あり直に變じて降雨となる午後一時頃より風勢益々
強し朝來氣候作爲ハ勉めて怠らず高窓及雨戸を閉ち又開き又閉ち天井筵を二重ヨす

る等實に言ふべからざるの勞を取り瞬間も油斷することなし午後五時風止み追々晴
れ同十一時晴天となれり明朝の寒冷を慮り今夕も埋火をあし利用して室内定温ヨ保
つ

四月廿六日　（催青九日目）

晴天穩和なり午前二時外氣下降四十四度ニ至れり然れとも室内ハ前夜來火力を利用
して定温を保てり午後一時頃より西方疾風を送り同三時に至りて止む本日ハ格別の
取扱を要せすして容易に定温を保つを得たり午後六時殘火を撿し新に一貫四百目を
埋む夜ヨ入り稍下降の傾あり依て午後十一時より火力を利用す

四月廿七日　（催青十日目）

朝來晴天にして外氣寒冷なり午前二時外氣四十度ヨ降れり然れとも室内は尚定温を
保てり午前十時頃より温度上昇せんとするを以て火炉炭火の掛灰を厚ふし火力を減
退せしめ高窓及蹴込みを全開し欄間を外し内障子を開放す續て天井筵ヨ剝き氣管を
外す等の取扱をなし清涼の手段を盡す午後二時益々温度昇進し外氣ハ既に七十八度

を示すを以て蠶室内氣候作爲尤も注意と怠らず午後三時西方和風起り暫時よして止む同五時欄間及氣管を閉す明曉の寒冷を慮り午後六時炭火を增埋す續て天井筵を覆ひ高窓を閉す本日蠶種を檢するに卵面頗る膨脹し中にも一二粒飛青せしものあり午後十一時頃溫度下降せんとするにより內障子を閉ぢ火炉掛灰を薄くす

四月廿八日　（催青十一日目）

朝來晴天なれども室內清涼なり依て炭火を利用し定溫を維持す午前十時頃より追々溫度上昇れ傾あるを以て炭火れ掛灰を厚くし其他の取扱ふ注意すると前日に異ならす午後一時ふ至り外氣ハ已に八十度を示すを以て益々室內の上溫を恐れ注意怠らす同六時に至るも暑氣尙去らす然れども明朝の寒冷を慮り埋火をなす同九時に至り稍清涼に向ふを期とし雨戸及高窓を半開ふする等の扱をなす本日ハ已ふ卵面一分通りの催青を見る

四月廿九日　（催青十二日目）

朝曇天ふして少しく蒸熱の氣味あり午前四時天井筵を一重となし少しく火炉掛灰を薄くし火力を用ひ之れか防禦に注意す午後一時頃より東方の疾風あり然れども室內定溫を保つ同八時風向變して北風となる依て明曉必す寒冷の甚しきを慮り午後六時殘火を檢するに七百目許と存せり依て新に一貫百匁を增埋す同八時頃より溫度稍下らんとするを以て內障子を閉す同十時外氣五十六度に降る此時室內七十度を保てり然れども其下降を恐れ天井筵を二重にす同十一時外氣五十度ふ降る依て火炉炭火の掛灰を薄ふし火力を利用し室內の保溫に注意す同十二時外氣四十四度に下る然れども室內依然として七十度を保てり

四月三十日　（催青十三日目）

本日朝來晴天果して近日稀有の寒冷にして午前二時外氣ハ已に三十九度の低に降れり依て室內溫度の下降せんことを恐れ尙火炉の掛灰を薄くす同三時室外三十八度に降れり然れども室內ハ前夜來注意して定溫を保てり午前七時頃より溫度稍上昇し日中に至り內外共に平溫なり午後二時頃曇天となる午後五時頃より西方疾風を送り追々晴れ同七時ふ至り全く晴天となる明日ハ掃立日なるを以て一層溫度の下降を恐れ

炭火一貫八百匁を埋む本日い卵面頗る膨脹し一二分通りの發蟻を見る依て之れを催青器より取出し蟻蠶を掃捨て（方言之れを蟲掃と云ふ）蠶籠を目通り位の所に載せ之れに原種を平置し午後十時原紙の量を秤る是れ明朝發育の蟻量を檢するよ便なるか爲なり同十時外氣五十三度に下降し室内温度又下降の傾あり依て火炉掛灰を薄くし火力を利用す同十二時外氣五十度よ下れとも室内い依然として七十二度を保てり

本日を以て催青を終る

第一齡表

（白玉種正蟻量四匁）

日次	月日	晴雨	華氏寒暖 室内	華氏寒暖 室外	六坪七分室用炭量	給桑回數	給桑一日量	一日給桑二坪平均量	入手	籠數	用桑名	節切
一	五月一日	朝晴晝夕晴	七二 七三 七二	四三 七三 六二	午後一貫六百目	四	五十七匁二分	二匁六分	正午下蟻四	一籠半五坪	早桑多胡桑六年木	一分五厘巾五厘長二分
二	五月二日	晴雨	七二 七三 七三	五九 六九	一貫四百目	七	百六十九匁二分	二匁八分	午前十時入手	二籠十一坪	全	一分八厘巾六厘長三分五厘
三	五月三日	晴雨	七二 七二 七二	五二 五六 五六	一貫九百目	五	二百四十六匁四分	二匁八分	午前十一時入手	四籠廿二坪	全	二分一厘巾七厘長七分
四	五月四日	晴雨	七二 七四 七一	五三 七四 五八	一貫七百目	六	五百九十四匁	三匁	正午紙拔	五籠四十四坪	全	二分七厘巾八厘長八分
五	五月五日	晴雨	七三 七三 七一	四八 五九 四一	一貫八百目	六	八百〇七匁八分四厘	三匁〇六厘	〇	全	全	二分七厘巾九厘長九分
六	五月六日	晴雨	七一 七二 七二	三六 六五 六一	一貫七百目	四	五百六十三匁二分	三匁二分	午前八時糠入同十一時裏拔	全	全	三分巾一分一寸長
七	五月七日	晴雨	七二 七四 七二	四九 七四 五六	一貫二百目	一	百三十二匁	三匁	午前〇時留桑	全	全	全

平均								
○	○	七二四八、五 七三六七、一 七一、八五、八	一貫六百十四匁三分	四、七	三百六十七匁一分	二匁九分二厘	○	○

一給桑量總計　二貫五百六十九匁八分四厘

一給桑回數　三十三回

一飼育時間　百三十二時間

一眠中時間　三十六時間

一木炭用量　十一貫三百匁

一眠蠶百頭量　一分四厘

備考　當所使用蠶籠ハ縦四尺横三尺二寸五分尺坪十坪を使用す

第十三　育養期

第一齡

五月一日（掃立當日）

朝來快晴なれとも曉天寒冷甚ゑ午前一時外氣四十九度に降る然れとも内氣ゑ異狀なゑ同二時室内温度稍下降れ傾あり依て又少しく火炉掛灰を薄くし火力を利用して定温を保つを得たり本日は豫定れ如く掃立に際するを以て午前第三時掃立準備れ爲め兼て催青中の蠶種を包紙に包み卵面を上ゑ向け蠶籠ゑ載せ蠶棚目通りの所ゑ插し置く午前十時高窓を開く同十一時三十分蠶種掃立の好時機方に來れり依て包紙を開きて其儘又据へ置くこと凡十五分時間許此間に於て蟻蠶ハ直接内氣に浴し擧止頗る活潑の看を呈す直に掃立に着手し正式の手順（掃立法前出）を經て正午十二時掃立を終り而して其原紙を秤量し水分一割二歩を減し正蟻量四匁と得之れを五坪半に擴け（一坪とハ方一尺を云ふ以下同し）六厘方の剉桑を一坪に付二匁八分の割合を以て給與す凡て給桑に斑掛けあるときは蠶坐の乾燥不平均にゑて蠶兒の成長不同を來すのなれば其平等均一に給桑す

べきは言ふ迄もなきことなれとも特に今回の給桑たる飼育の第一着ょ居るものなれば一層其平等ょ注意と用すべし此給桑を名けて居並桑と云ふ以後三回れ給桑ハ巾五厘長さ二分ょ剉み其量前回ょ比し少しく減量に給與せり當日室内整温の取扱ハ格別の手數を要せすゑて平温を保てり午後六時殘火を撿し新に一貫四百匁を埋む同七時高窓を半開ょし十二時に至り内氣下降の傾きあり依て火力を用ひ保温に注意す

五月二日〔自掃立二日目〕

早天靜穩少しく蒸熱れ氣味あり依て午前三時火力を利用し室内空氣の交替ょ注意す午前十時手入となし〔別籠ょ筵を敷き上に籾糠を振込み之れを能く平散せしめ其上に敷紙を敷き又其上に粟糠を散布し竹箸ょて蠶坐を〔ボッチ〕擴げとなし其積を擴むを云ふ〕此時蠶坐の坪數前日ょ倍し拾壹坪となす午後三時頃より小雨降る同六時殘火と撿するに七百目許を存せり依て新ょ一貫九百匁を埋む〔雨濕の氣を拂ふが爲め其量を增す〕同十一時室内稍冷濕の氣味あり依て火炉炭火の掛灰を薄らげ火力を籍り防濕に備ふ此際降雨尚霏々たり

五月三日〔自掃立三日目〕

前日來降雨尚止ます爲めょ濕氣增嵩の恐あり前夜來火力を利用ょ之れが防濕ょ注意す午前二時火氣稍減却の傾きあり依て尚火炉炭火の掛灰を薄らげ之れが來襲を防ぐ午前十時蠶兒の体色白變し始む午前十一時手入をなし其坪數を倍して二十二坪となす午後零時に至るも雨歇ます從て室内兎角冷濕に傾かんとす午後一時火力を利用して益々防濕の注意をなす同時体色益變して白色に一齊す〔方言之れを毛振と云ふ〕午後六時埋火を行ひ同十時又火炉炭火の掛灰を薄らぐ同十一時天井莚を二重となす降雨終夜歇ます

五月四日〔自掃立四日目〕

午前一時降雨止み五時に至り快晴となる同七時高窓を開き續て天井莚を一重となす同八時紙拔用意として一坪に對ゑ粟糠一合五勺の割合を以て糠入をなし〔糠入とハ蠶坐上へ糠を振り掛け之れょ給桑するを云ふ〕糠上二回の給桑を終り正午十二時糠上蠶坐を捲り別總て裏拔準備れ爲め之を行ふ〔籾糠ハ必す粳糠ょ限る〕を散布ゑ之れに蠶坐を移す此際より敷紙と籠ょ莚を敷き之れょ薄く籾糠〔粳糠ょ限る〕を散布ゑ之れに蠶坐を移す此際より敷紙と要せす故に之れを紙拔と云ふ其際坪數を倍して四十四坪となす午後六時殘火を撿し一貫七百匁を增埋す暫くして高窓を閉す同九時に至り西北の疾風ありしが或ハ止み

或ハ起り同十一時に至りて全く止む此時明曉の寒冷を慮り天井莚を二重になす

五月五日〔自掃立五日目〕

曉天清涼なり午時零時寒冷甚し依て火炉炭火の掛灰を薄らけ火力を藉りて之れが防禦ま注意とおす同二時外氣四十六度に降り内氣ハ保温に勉めて七十二度を降らゑめす同十時北方より疾風起り室内温度下降せんとするを以て一層保温ま注意す午後に至り西風に變じ風力强烈となり同六時明朝極めて寒冷をるを慮り炭火一貫八百匁を增埋す尤も前日の殘火九百匁許を存せり午後九時頃又北風に變し寒冷を覺ゆ依て火炉の掛灰と薄くし防寒の注意をなす同十二時外温四十度に下降し降霜の兆あり然れども室内は豫て充分保温に注意したるを以て七十一度を下さず本日蠶兒ハ已ま眠前大食期に入り食慾を增す

五月六日〔自掃立六日目〕

午前零時十分風位又變ゑて東方微風となる暫くして外温を檢するに已に三十八度に降り室内ハ依然七十一度を示す同二時外温三十七度に降る火勢減退の姿なるを以て掛灰と薄くゑ火勢を增す同三時前風全く止み寒冷殊ま甚ゑ曉天外温三十五度弱ま下降し未曾有の降霜を見る然れども徹夜瞬間も油斷なく保温ま注意したる爲め室内ハ七十一度を降らゑめさりき本朝給桑ま際し桑葉貯藏場の寒冷又甚しきに依り給桑前先つ餌桑を貯桑場より取出し凡そ五十分間許温度六十四五度の室内ま入れ置きて其桑葉の冷氣稍去るを待ち始めて給桑せり之れ蠶兒は室内の定温度内に蠢動しつゝあるに之れま冷桑を其儘與ふるときは多くハ蠶兒に害を及すを以て暫く暖室に置きて後給與したるものなり人多くハ斯る冷桑を與へて不知不識之れが害に冒さるゝものなきにあらす宜ゑく如斯場合に於てハ注意すべきこと肝要なりとす午前八時蠶兒を檢するに已に皮膚上脂肪の光澤を現ハし一坪ま對し一二頭淡黃色に變じ催眠の兆を示すもれあり依て糠入の好時期なりと認め直に休裏拔準備の爲め糠入をなし給桑す午前十一時糠上第二回れ給桑を終る〔此給桑ハ裏拔の爲め糠上蠶坐と捲くるに便なる〕の燥に過くるの虞あると以て第一回給桑のみならす〔ボッチ〕擴げの手術を盡すの間蠶坐乾度れ乾燥ま至らさる以前〔六歩乾き〕ま給桑末た適〔後一時間を經て眠裏拔ボッチ擴けをなす〕〔此ボッチ擴けと稱するハ各齡とも眠裏にハ必す之れを行ふものまして裏拔とゆゑ〕す〔別籠に移すに當つて先づ蠶坐を捲り移し置き其蠶坐を竹箸まて〕蠶兒成長三眠四眠

よ至らは竹箸を用ひす指頭よて之れと行ふ恰好の大さに狹みて蠶莚棟上に點々配列すること尺坪一坪よ對し凡百ボッチ一ボッチに對し凡そ十頭を置くの標準に依る其有樣縱横整列恰も稻田の刈取し跡を見るか如し斯く其ボッチ擴を行ふ所以ハ眠期に際し其ボッチとボッチの間隙ハ空氣能く流通し從て蠶坐の乾燥宜しきと以て就眠齊一に且つ眠中蠶坐よ蒸熱を釀す等の患なく眠蠶ハボッチの小高き個所に於て安全竣蛻をなし其蛻皮も直に乾燥し從て起蠶又强壯活潑なるを見る此故に眠裏拔には必ず此ボッチ擴けを行ふを法とす（其ボッチの乾桑加減を見計ひ其好度を認め）ボッチ上第一回の給桑となす此給桑は平素より其丈を長く剉むを法とす之れボッチの山と山とに跨る樣給桑し得べきを要すればなり故よ此給桑と稱して橋架け桑と云ふ午後六時頃より曇天となる同時殘火を撿し新に一貫七百匁を增埋す午後十時炭火掛灰を薄くし眠期前なるを以て定度を下らしめざるを勉む

五月七日（自掃立七日目）

朝來靜穩にして晴天なりと雖とも寒冷甚し依て保温よ注意す午前零時ボッチ上第二回目の給桑となす此際蠶兒ハ概ね就眠せり即ち之れを止桑となす午前八時高窓を開く同九時眠蠶体量を撿せしに百頭量一分四厘なりき同十時火炉掛灰を厚くし內障子を開く正午に至り温度上昇の傾あり依て天井莚中間四枚を剝ぎ去る本日ハ眠中あるを以て定温と越もるを忌むが故よ室內清涼を求めて怠らず午後五時高窓を半開にし天井莚を覆ふ同六時例の如く炭火一貫二百匁を埋む續て高窓を閉ぢ同九時內障子を閉ず午後十一時外氣五十四度に下降し室內稍冷氣を覺も依て火力と用も時ハ內氣七十壹度なり

本日を以て第壹齡を終る

第一齡表

日次	月日	晴雨	華氏寒暖 室內	華氏寒暖 室外	一室用炭量	給桑回數	給桑一日量	一日給桑一坪平均量	手入	籠數 坪數	用桑名	節目切歩
八	五月八日	朝曇夕晴	七二 七四 七二	五三 七五 六一	六坪七分 午後六時一貫七百目	三	三百九十六匁	三匁	午後〇時中桑午後四時桑附	五籠四十四坪	早桑多胡巾六年木	三分五厘巾一分長八分
九	五月九日	全曇全全全	七二 七四 七四	五四 七三 六〇	全一貫七百目	五	九百二十六匁	三匁五分	午前九時糠入全十二時起蠶裏扱五分出シ	七籠六十六坪	全	四分巾一分五厘長一寸
十	五月十日	全曇全全全	七二 七五 七三	五四 七六 六〇	全四時半一貫七百目	七	一貫七百七十一匁	三匁五分	午後〇時糠入全二時半中裏扱	九籠八十八坪	全	四分五厘巾一分八厘長一寸
十一	五月十一日	全晴全曇全全	七二 七三 七二	五五 七〇 五三	全六時一貫九百目	四	一貫二百六十七匁二分	三匁六分	午前八時糠入午後〇時眠裏秡	全	全	五分巾二厘長一寸二分
十二	五月十二日	全晴全全全	七二 七四 七七	四八 七八 七三	全一貫七百自	一	三百〇八匁	三匁五分	午前四時留桑	全	全	五分巾一寸五分長一寸二分
平均	〇	〇	七二、七四、七三、六二、四	五三、二一、七四、四十匁	一貫七百四十匁	四	九百三十三匁二分四分	三匁四分二厘	〇	〇	〇	〇

一飼育時間　八十八時間
一木炭用量　八貫七百匁

一眠中時間　二十四時間
一眠蠶白頭量　七分二厘

第二齢

五月八日　（自掃立八日目）

午前零時蠶兒ハ悉く蛻皮となし運動活潑よして餌桑を求むるの狀切なるが如し依て中桑を與ふ（蠶兒起揃ひ初めて給桑するを中桑と云ひ第二回目に給するを桑附と云ふ）本日曉天薄曇よして温度下降の傾きあり午前二時火炉の掛灰を薄ふし保温よ注意す午前八時頃快晴となる同十時よ至り温度追々上昇せんとするを以て再び掛灰を厚ふし氣管及欄間を開き天井莚を育場の上を悉く剝ぎ以て清涼を求む午後一時北方より疾風起る依て北方欄間及氣管等を閉ず夜に入り風稍止む午後六時室内温度尚高しと云へとも明朝の寒冷を慮り埋火をなす同十時頃に至り温度稍下降せんとすると以て高窓を半開よおし天井莚内障子ハ開放の儘におし置く

五月九日　（自掃立九日目）

早天曇にして午前一時外氣は五十一度に下降す然れとも室内定温を保てり同二時頃室内稍寒冷よ傾かんとす依て高窓を全閉す同八時頃晴天となる同九時起蠶裏拔準備

として糠入をなし之れに給桑す（今回迄れ糠入には何れも粟糠を用ゐしが次回の中裏糠入よりは籾糠を使用す）正午十二時糠上第二回の給桑となし後ち五十分を經て起蠶裏拔をなし六十六坪に增積す此際より温度稍上昇せんとするを以て火炉掛灰を厚ふし其他排氣窓を開き天井莚を剝ぎ暫くして内障子を開く等の取扱をなす午後六時殘火を撿し一貫七百匁を增埋す午後七時高窓を閉ぢ同八時天井莚内障子を舊に復す同十一時室内冷濕の氣を覺ゆ依て炭火の掛灰を薄ふす

五月十日（自掃立十日目）

朝來陰雲漠々室内濕氣增嵩を覺ゆ依て午前六時高窓を開き天井莚中央二枚を剝き火力を利用す日中に至り温度上昇すると共に蒸熱の氣味あり故に間斷なく之れが防禦に注意す午後零時中裏拔準備れ爲め糠入をなし糠上第二回目の給桑を終り午後三時三十分中裏拔をなし八十八坪に增積す（即ち初眠坪數の一倍に當る）午後四時頃忽焉西北の强風起り樹を動かし砂を捲くるに至る依て北方高窓を半開にし雨戸を一尺位れ細目に閉す爲めに又室内冷濕に傾かんとす即ち埋火時間を早め四時半に之れを行ひ利用して之れを防ぐ倖にして暫時の後風止む夜に入りての取扱い畧前日に同し

五月十一日（自掃立十一日目）

晴天朝西北の風あり爲めに寒冷なり午前二時外氣い五十二度に下れり同三時又一度を下降す然れとも室内い前夜來火力を利用し保温に注意したるを以て絶へず七十二度と保てり午前八時蠶兒い皮膚上脂肪れ光澤を現いし糠入の好時期と認め眠裏拔準備の爲め糠入をなす糠上二回の給桑を終り午後〇時休裏拔ボッチ擴げをなす一坪五十ボッチ一ボッチに十頭を置くの標準に依る右終りて其乾桑工合と見計ひボッチ上第一回の給桑をなす（其剉桑平日より割合に長きい初眠れ際に記するが如し）午後六時明曉の寒冷と慮り特に炭量二百匁を增し一貫九百匁を埋む夜に入り氣候取扱畧前例に同ス

五月十二日（自掃立十二日目）

晴天和風あり早天寒冷なりしが爲め室内い前夜來火力利用し定温と保つと雖とも尙下降れ恐あり午前一時再び火炉炭火の掛灰と薄くす此時外氣四十六度なりき同二時四十三度に降り仝三時又二度を降れり仝四時ボッチ上第二回の給桑と終る此際蠶兒い

概ね就眠す即ち之れを止桑とす（此給桑をなすよ先ち餌桑を貯桑場より取出し暫く暖室に置き冷氣を去らゝめて給與せしこと本月六日霜の際取扱に同じ）午前九時頃より温度追々上昇せんとす依て火炉掛灰を厚くし火力を減却せしめ其他天井莚扱場の上を悉く剝ぎ去り高窓及氣管を開放し續て高窓の腰板等をも取外し清涼と求むるの手段を盡す午後日輪西よ春き夕陽射照するを以て北方雨戸を壹尺余の細目よ閉ぢ以て之れを遮斷し日沒前又之れを開く（此取扱は本日に始まりしにあらす夕陽射照し室内温度上昇の恐あるときゝ常に之れを行ふ）午後六時埋火をなし夜に入りての取扱ゝ前例に同し本日を以て第二齡と終る

第三齡表

日次	月日	晴雨	華氏寒暖 室内	華氏寒暖 室外	六坪七分壹室用炭量	給桑回數	給桑一日量	一日給桑二坪平均量	手入	籠數坪數	用桑名	篩目切歩
十三	五月十三日	朝晴晝夕	七二七八七四	五七八六七三	午後七時一貫二百目	六	一貫八百四十八匁	三匁五分	午前四時中桑午後九時糠入午後十二時起裏拔	九籠中桑坪	李次郎巾長	六分
十四	五月十四日	全晴全全	七二七七七三	五四八二六九	全一貫三百目	四	二貫百十二匁	四匁	○	十三籠二分百三十二坪	全	四分
十五	五月十五日	全曇全全	七三七六七五	六五八〇七一	○	五	二貫九百九十二匁	四匁	午前九時糠入午後〇時中裏板全九時休裏糠入	十八籠百七十六坪	全	五分
十六	五月十六日	全曇全雨全	七四七五七四	六六七一六四	午後六時一貫四百目	三	一貫七百九十五匁	三匁四分	午前四時休裏拔午後六時留桑	全	全	六分
十七	五月十七日	全曇全晴全	七二七四七二	五五七二七一	全一貫三百目	○	○	○	○	○	○	○
平均	○	○	七三、六五、四七六、七八、三七三、六九、六		一貫四十目	四、五	二貫百八十六匁七分	三匁七分二厘	○	○	○	○

一飼育時間　八十六時間
一木炭用量　五貫貳百匁

一眠中時間　三十六時間
一眠蠶百頭量　三匁八分四厘

第三齡

五月十三日　（自掃立十三日目）

晴天午前二時外氣ハ下降五十三度を示すと雖とも室内ハ前夜來火力を利用し怠ちさるを以て七十一度を保てり同四時蠶兒は概ね起揃ひ未だ蛻皮せさるもの一籠中僅よ十頭内外にして方よ飼食の好機と認め中桑を與ふ同七時頃より追々温度上昇せんとするを以て火炉掛灰を厚ふし火勢を弱め天井莚内障子を適度よ開き暫くして欄間及氣管を開く午前十一時桑附をなす正午に至り温度一層上進せんとするを以て本日初めて内障子鴨居上欄間南北を取外す（今迄欄間を取外すと云ひしは總て二階上欄間と云ふ）午後三時外氣上昇九十八度に達し内氣ハ朝來其上昇豫防に注意したる爲め八十二度にて止まるを得たり初齡の始めより外温の最高を示したるハ本日と以て第一となす午後七時室内温度尚高しと雖とも明曉の寒冷を慮り殘火を撿し新に一貫二百目と増埋し掛灰を厚ふして火氣の發散を弱む埋火の後二階欄間を箝む夜に入りて室内温度尚容易に降らす同九時起裏扳準備の爲め糠入をなす午後十一時頃に至り室内温度稍下降したるを以て鴨

居上欄間を箝め天井莚を覆ひ高窓を半開にす同十一時糠上二回の給桑をなし五十分を經て起裏拔をなし百三十三坪に增積す同十二時外温六十度に降り明曉寒冷の兆あり依て火炉の掛灰を薄らげ之れが豫防をなす掃立當日より今日に至る迄餌桑ハ皆短冊切とし長方形に剉み篩を用ゐて之れを給したりしが起裏拔糠上の給桑よりハ桑葉と三角切となし箕よて簸き篩を用ゐず指頭にて給與す其簸く所以ハ此際の桑葉ハ新梢の儘掻き取るを以て之れを剉み簸て其小梢を去るが爲めなり

五月十四日〔自掃立十四日目〕

午前二時外温五十度に降れり然れとも室内ハ前夜來注意したるが爲め七十一度を保てり同五時外氣五十三度に達し室内一度を昇す同七時頃より追々温度上昇せんとするの傾あり本日も日中よ至らば又昨日よ劣らざる温度よ至ることを認め前日の手續をなし清涼に注意す本日の給桑より桑葉ハ只三角切に剉みたるまゝにて箕を用ゐず適度の四角目篩を用ゐて截末を篩ひ去りて給與す午前十一時東方疾風起る温度は果して上昇し午後二時外氣八十九度に達し内氣ハ七十八度に止まるを得たり同三時頃よ至りて風止む同七時埋火をなす夜に入りてれ取扱畧前日に同玄本夜十二時よ至るまて室内ハ平温にして格別の取扱を要せさりき

五月十五日〔自掃立十五日目〕

朝來平温午前二時頃より曇天となり降雨の兆ありしか追々晴れ來り九時頃よ至りて快晴となる同時中裏拔準備の爲め糠入をなし給桑す昨夜來蠶兒ハ已に大食期に入り食慾大に進興し蠶体の成長肥滿する目前に見るるか如し日中に及ひ温度昇進するを慮り豫て之れが注意をなす正午に及ひ果して上昇依て本日初めて板壁なる下部の腰欄間を外す午前十一時二十分糠上二回の給桑を終り四十分を經即ち午后零時中裏拔をなし百七十六坪よ增積す〔二眠坪數の一倍に當る〕午後六時埋火をなし同九時蠶兒を撿するよ生長極度よ達し脂肪の色澤皮膚よ現はれ一二頭淡黃色よ變し催眠を示すものあり即ち好期と認め休裏拔準備として糠入をなす同時頃より微雨降ること一時間許にして止む前日來温暖なりしか爲め炭火を利用すること少く殊よ殘火を撿するに凡そ一貫二三百匁を存するを以て埋火見合せたり

五月十六日　（自掃立十六日目）

朝來曇天爲めよ室內陰濕の氣味あり本日ハ眠期に際し成るへく乾燥を要すへきを以て午前一時火炉の掛灰と薄らけ防濕の注意をなす午前三時糠上第二回の給桑を終り同四時休裏拔ポッチ擴をす一坪二十五ポッチ一ポッチに付十頭を置くの標準に據る同三時半頃降雨あり爲めに又濕氣の來襲するを虞れ一層防濕よ注意す午前十一時ポッチ上第一回の給桑となす午後二時東方の風あり同六時殘火を撿するに前夜埋火せさるのみならす本日防濕の爲め使用しさる以て極めて少量を存するのみ依て新に一貫四百を增埋す同六時ポッチ上第二回の給桑をなす（ポッチ上の給桑ハ二回共又適度の短冊切に剉み箕を用ひ莖を去り篩を以て截末を除きて給桑す所謂橋架け桑なり）此際蠶兒ハ概ね就眠し餌桑を求むるもの僅に一坪三四頭に止まれり依て之を止桑となす夜に入り雨尙歇まず依て雨戸高窓等の閉時を早めたり午後十一時頃室內又少しく冷濕よ傾かんとするの氣味あり依て火炉掛灰を薄くして火氣を用ゐ濕氣を拂ふ

五月十七日　（自掃立十七日目）

午前二時降雨止みたれとも外温五十度內温七十度に降り室內又冷濕の傾あり依て尙火炉炭火の掛灰を薄らく同三時頃より晴天となる室內火氣の籠るを虞れ高窓を半開にす同五時眠蠶量を撿するに百頭体量三匁八分四厘なりき同七時頃より晴天となる依て高窓を全開にし炉炭火の掛灰を厚ふす暫くして天井莚を剝ぎ內障子を開く本日は眠中なるを以て温度の上昇せさると勉む本夕殘火と撿するよ凡そ七百匁許を存せり依て二貫目となす爲め新に一貫三百匁と埋む午後九時莚を覆ひ高窓と閉ぢ同十時障子を閉ず同十一時頃より温度下降せんとするを以て天井莚を二重とし少しく火炉の掛灰と薄くし火力を利用して七十度を繼續せり

本日を以て第三齡を終る

第四齡表

日次	月日	晴雨	華氏寒暖 室内	華氏寒暖 室外	六坪七分壹室用炭量	給桑回數	給桑一日量	一日給桑一坪平均量	手入	籠數	用桑名	節目切歩
十八	五月十八日	朝曇晝雨夕全	七〇	五四	午後四時一貫九百目	三	二貫二百九十六匁八分	四匁三分五厘	午前六時中桑午後二時桑附	十八籠百七十六坪	中桑空次郎七年木	六分
十九	五月十九日	全全全全	七二	五四	午後六時一貫三百目	四	四貫八百九十二匁八分	五匁	午前九時糠入同十時起裏拔	午前十時三十六籠四分	全	六分
二十	五月廿日	全全全全	七二	五五	全五時一貫二百目	五	六貫六百匁	五匁	午後十一時中裏拔糠入	二百六十四坪	全	七分
二十一	五月廿一日	全全全全	七二	六一	全六時一貫三百目	五	九貫〇〇九匁二分	五匁四分	午前九時中裏拔	三十八籠三百八十坪	全	八分
二十二	五月廿二日	全雨全曇全雨	七二	五九	全二時二貫目	四	八貫二百〇八匁	五匁四分	午前五時糠入午後二時ポッチ	全	全	九分
二十三	五月廿三日	全曇全全全雨	七一	六一	全五時一貫目	二	三貫〇四十匁	四匁	午後〇時留桑	全	全	巾四分長一寸四五分
二十四	五月廿四日	全曇全晴全曇	七三	六三	全六時一貫百目	〇	〇	〇	〇	全	〇	〇

平均	○	○	七一、七五八、一 七四、一六九、七一 七三、七六二、七	一貫四百目	三、八	五貫六百 七十四匁 四分	四匁八分 一厘	○	○	○	○

一給桑量總計　三十四貫〇四十六匁八分　一給桑回數　二十三回

一飼育時間　百二十六時間　一眠中時間　四十六時間

一木炭用量　九貫八百匁　一眠蠶百頭量　十八匁四分六厘

第四齡

五月十八日（自掃立十八日目）

前夜來火力を用ひ來りしも早天曇にして尙室內冷濕の氣味あるを覺ゆ依て午前一時一層火炉の掛灰を薄くし火力を利用して之れが防禦に注意す午前三時外溫五十度より下れり然れとも室內ハ七十度を維持す午前六時蠶兒概ね起揃ひ擧止活潑にして餌桑を求むるの狀あり即ち飼食れ好機と認め中桑を與ふ（中桑給與の注意ハ每齡共ヨ同ジとすれとも當齡よりハ特ヨ其注意を要す凡て起蠶中桑ハ斑掛けなくして充分平等ヨ散り渡るを要すと雖とも若し其給桑多量に過ぎて踏付桑ヨ屬する等のことあるときハ蠶兒の蛻却せる舊皮の汚穢物棘桑と相合して爲めヨ蒸熱を釀し蠶兒に害を與ふるヨ至り之れに反して又少量ヨ失するときハ桑不足を生ずるの患ひあるものなれば其給桑加減ヨ尤も注意斟酌を要すべし）午前八時より降雨始まり日中に至り雨勢益々强し之れか爲み外溫昇らず午前十一時尙五十四度を示せり從て室內ハ冷濕ヨ傾かんとするを以て一層火力を用ゆ故に室內又蒸熱れ籠らんことを虞れ天井莚ハ扱塲の上中間二枚と剝去りたり午後二時桑附をなし同四時炭火ハ概ね利用し盡し僅に三四百匁を存するを以て理火の時期を早め

特に炭量を増し一貫九百匁を埋む同八時天井筵を剝ぎたるを舊ゝ復す午後十時雨止む同十一時又幾分炭火の掛灰を薄くすゝ之れ雨後室内に存する濕氣を拂ふが爲めなり

五月十九日　〔自掃立十九日目〕

前夜來火力を利用し注意したるが爲め本朝曇天ゝして外氣寒冷なるゝも不拘室内ハ依然七十一度を保てり午前三時又火炉の掛灰を薄らぐ同九時起裏稜準備の爲め糠入をなし給桑す〔中桑より給桑五回目〕〔都合に由り糠上一回の給桑にて起裏稜をなし二百六十四坪ゝ増積し二十七籠に置く午後六時に至るまで内外穩にして臨機の取扱を要せず同時頃より外温下降す依て明曉の寒冷を慮り殘火を撿し新に一貫三百匁を埋む高窓雨戸の開閉ハ豫ての取扱に同じ午後十一時陰雲重疊催雨の兆あり爲めに室内稍寒冷に傾かんとするを以て少しく炭火の掛灰を薄らぐ

五月廿日　〔自掃立廿日目〕

午前一時より降雨す室内尙冷濕に傾くを以て一層火炉炭火の掛灰と剝ぐ午前中室内平温を保ち別に臨機の取扱を要せず午後に至り室内温度は依然定温を保つと雖ども

濕氣の増嵩を防ぐが爲めに火力と利用す依て又一方蒸熱の籠らんことを恐れ天井筵扱場の上を剝き取り以て鬱氣の排除を計る本日ハ雨天の爲め餌桑の乾燥緩慢にして給桑四回なりき埋火時間一時間を早め午后五時之れを行ふ同九時天井筵を覆ふ同十一時中裏拔準備の爲め糠入をなす此際降雨尙歇まず依て又火炉炭火の掛灰を薄らく

五月廿一日　〔自掃立廿一日目〕

午前二時雨歇む然れとも室内蒸熱の氣味あり依て天井筵中央を剝き火力を利用し防濕れ注意となす午前五時高窓を開く同九時糠上三回の給桑を終り中裏拔をなす〔裏拔ハ概ね糠上二回の給桑と以て之れを行ふを法とす然とも今茲に三回の給桑を行ふ所以ハ此際に於て蠶兒れ頭數を調査するを以て爲めゝ裏拔に長時間を要するゝ故ゝ特に糠上三回の給桑を行ひたるものなり然らされハ其頭數を〕計算する間に於て蠶坐乾燥ゝ過くるを虞るれハなり〔午前九時より中裏拔をなし頭數を計筭して三十八籠ゝ置く〕〔本日迄ハ蠶坐を分箔するに只肉眼の鑑定に依て等分に分箔したるものなれハ自然其頭數に幾分不平均なきを保せす今や蠶兒も肥大となり頭數を計筭するも容易のことゝして若し此後に於て居並ひ頭數毎籠不平均なるときハ從て餌桑の乾燥又不平均を來し同時に蠶兒の生長ゝも不同を生するを以て之れを均一ならしむるか爲め尺坪一坪に對し一百頭即一籠千頭を置くの標準ゝ依り裏拔をなしつゝ其頭數を調査せしに蟻量四匁ゝして三万七千

五百頭あり元來蟻量四匁の頭數ハ大約四万頭にして之れを飼育し來り或は棄り或い負傷し結繭頭數概して三万五千頭位ヨ減するを普通とす依て本年も其標準に據り增積の取扱をあし來りしに像定の頭數より二千五百頭の多きを見るヨ至りたり之れ即原種撰扱の行届きたると蠶種中にありて第一期及第二期の取扱其當を得且つ催青ヨり飼育の誤らざる結果に原因せるを覺ゼ午後ヨ至り尙未た蒸熱の氣味あるを以て同三時又火炉炭火の掛灰を薄くし內氣の新陳代謝を謀る午後六時殘火を檢し新ヨ一貫三百匁を增埋す夜に入り高窓天井莚の扱略ぼ前例に同し同十一時防濕の爲め又火炉掛灰を薄くす此時已に蠶兒は大食期に入り食慾大ヨ進與し擧動活潑なり

五月廿二日（自掃立廿二日目）

午前一時頃より降雨の兆あり同三時に至り果して小雨降る室內は前夜來引續き防濕の注意を怠らす午前五時蠶兒を檢するに催眠の兆を現はし蠶体已ヨ淡黃色に變し就眠ヨ迫れるもの一籠一二頭を見る依て糠入の好時機と認め休裏秡準備の爲め糠入をなす午前十一時雨歇む本日は室內濕氣ハ增嵩ありしか爲めに高窓天井等に注意し絶へず炭火を利用したるを以て正午過ぎに至り概ね消費し盡したり依て埋火を早め午

後二時二貫匁を埋用す同二時糠上第二回の給桑を終り一時間を經て休裏拔（ボッチ）擴げをなす一坪凡十ボッチ強の割合にて一ボッチ凡十頭弱を置くの標準に據る同五時より又降雨同九時稍微雨となり同十一時ヨ至りて歇む此時火炉の掛灰を薄くし保溫に注意す

五月廿三日（自掃立二十三日目）

曇天降雨の兆あり室內を前夜來引續き火力を用ひたるが爲め平溫を保てり午前五特ボッチ上第一回の給桑をなす（昨日午後三時ボッチ擴げをなし爾後濕氣增嵩の爲め蠶坐の乾燥宜しからず爰に今回の給桑まで十四時間を經過せり）（ボッチ上の給桑ハ其乾燥宜しからんを欲するを以て特ヨ剉桑方に注意し巾三分乃至四分長サ一寸四五分の短冊切ヨ剉み截末及新梢を除去して給與す午後零時ボッチ上第二回ノ給桑をなす此際蠶兒ハ概ね就眠す乃ち之れを止桑となす午後四時頃に至り降雨あり暫くにして止む同五時殘火を檢するヨ七八百匁を存せり依て新に一貫匁と增埋す終日靜穩にして格別の取扱を要せず只防濕の注意を怠らざりしのみ午後十一時眠蠶体量と檢するヨ百頭量十八匁四分六厘なりき

五月廿四日　〔自掃立二十四日目〕

午前三時頃まで曇天なりしが追々晴れ來り同六時半に至る頃快晴となる乃ち火炉の掛灰を厚ふし天井莚を剝き續て高窓を開く日中に入り果して上昇せんとするを以て特に眠中なるより勉めて清涼を求むるゑ尽力す午後五時頃又曇天となる夜ゑ入りての取扱は前例ゑ畧相同し本日を以て第四齡を終る

因ゑ記す此四齡七日間ハ雨天或ハ曇天のみゑして快晴の日ハ殆んと一日もなかりき故ゑ室内濕潤の氣多きが上に蠶兒ハ日と追て益々生長肥大となり食桑の給與も從て多量なれば兎角室内冷濕に傾き易く之れが防禦ゑ就てハ實ゑ言ふべからざる注意尽力と極めたり

第五齡表

日次	月日	晴雨	華氏寒暖 室内	華氏寒暖 室外	六坪七分壹室用炭量	給桑回數	給桑一日量	給桑一日平均量	給桑手入	籠數坪數	用桑名	節目切歩
廿五	五月廿五日	朝曇晝夕雨	七三 七五 七四	六三 六九 六三	午後六時一貫百目	三	七貫四百十匁	六匁五分	午前十時中桑	三十八籠三百八十坪	晩桑八日市八年木	枝桑
廿六	五月廿六日	全	七四 七四 七三	五七 六四 五七	全一貫六百目	四	十貫六百四十匁	七匁	裏拔一回糞拔一回	全	全	全
廿七	五月廿七日	全晴	七三 七四 七四	五八 六五 六二	全一貫二百目	六	十九貫三百八十匁	八匁五分	裏拔一回糞拔二回	全	全	全
廿八	五月廿八日	全曇 全雨	七三 七四 七二	五三 六五 五五	全一貫九百目	五	二十一貫二百八十匁	十一匁二分	裏拔一回糞拔三回	全	全	全
廿九	五月廿九日	全曇 全雨	七二 七四 七三	五二 六七 五六	全一貫五百目	五	二十三貫八百匁	十三匁	裏拔一回糞拔二回	全	全	全
三十	五月三十日	全雨 全	七二 七三 七二	五三 六六 五六	全四時二貫目	四	二十六貫六百匁	十七匁五分	裏秡一回糞拔三回	全	全	全
三十一	五月三十日	全晴 全 全	七二 七四 七二	五三 七〇 五二	全七時一貫九百目	五	二十二貫八百匁	十二匁	裏拔一回糞拔四回	全	全	全

三十二	六月一日	仝晴	七二四七	仝六時一貫二百目	三	七貫五百	十	午後六時悉皆上簇	三十八籠十五籠六籠	仝	仝
	仝仝	仝仝	七六七三								
	仝仝	七二五七									
平均	○	○	七三、六五四、五 七四、二六七、三 七三、七五七、二	一貫五百五十匁	四、四	十七貫六百二十六匁	十匁○七厘	○	○	○	○

一給桑量總計　百三十九貫四百十匁

一木炭用量　十二貫四百匁

一成長極度十頭量　十一匁一分

一給桑回數　三十五回

一飼育時間　百七十六時間

第五齡

五月廿五日　〔自掃立二十五日目〕

朝來曇天室内濕氣增嵩の虞あり依て午前三時火炉掛灰と薄くし炭火を利用して之れを防く午前十時東方の和風雨氣を帶びて來る同時蠶兒ハ概ね起揃ひ蛻蛻せざるもれ一籠中僅に數頭に止まり起蠶は擧動活潑よして餌桑を求むるの狀と呈す乃ち蠶坐上に薄く籾糠を散布し上よ茅網と敷き〔此網ハ四眠起より熟蠶迄の間よ使用するものして裏拔糞秡等の用に供するのみならず餌桑を支へ〕莢沙と密接せし〔網上よ枝桑と與ふ之れを中桑とす〕めざるの功あり〔今回の中桑を給するに當て蠶坐上よ籾糠を散布し特に茅網を用ひ之れよ枝桑と給したる所以ハ凡そ齡の何齡を問ハず起蠶の當時は其蠶兒の蛻却せる舊皮濕潤して之れが爲め此際の蠶坐ハ最も其腐敗速うなるものなれば其乾燥の宜しからざるもれに向つて給桑に給桑を重ぬる樣のことあるときは忽ち蠶坐よ濕潤を生ずるゑ之れに反するときは蒸熱を釀し蠶兒に大害を與ふべければ此の際の取扱ハ蠶兒飼育上最も注意斟酌すべきの一大要點なりとす然るに本日は東風よて且つ雨天なれば勢ひ室内濕氣の來襲は免れ難きよ特よ蛻皮の濕潤あるを以て此儘直に中桑を與へなば餌桑と蠶坐と密接し一層濕潤を增し或ハ蒸熱を生じ腐敗の氣を釀すの恐あるを以て茲よ蠶坐上に籾糠を散布し之れよ網を布き網上よ給桑したるものなり斯くせば蠶忽ち餌桑を求めて網上に出で濕潤の氣ハ籾糠に依て除去せられ網に依て餌桑を支ふるが故よ餌桑と莢沙とも又密接することなければ食桑ハ清潔にして蠶兒の衞

生に適するのみならず蠶坐腐敗の患ひなし故に特に右の取扱となしたるものなり若し快晴よして乾燥の日ならば籾糠を散布するよ及いす又網上よ給したる餌桑ハ晩桑八日市(霜くゞりと云ふ)なりしか若し中桑より雨三回の給桑よ葉形大なるも(のを用ゆるに於ていハ新梢の儘右八日市の葉形位よ荒切りをなし給與すべし)午前十一時半雨止む午後二時頃よ至り又降雨し加ふるよ東方より和風あり同四時桑附をなし同六時殘火を撿し新に一貫百匁を増埋し午後七時高窓を半開にし火力を緒りて冷濕の氣を拂ふ午後八時忽焉東北の疾風起り雨を飛ばす乃ち雨戸高窓を閉ぢ天井莚を覆ふ暫時よして風歇むと雖とも雨終夜止ます

五月廿六日 (自掃立二十六日目)

前夜來降雨霏々として尚止ます爲めに室内冷濕の傾あり午前二時火炉掛灰を薄くす午前十時中桑後第五回目の給桑に際し起裏抜準備ハ爲め網を布き其上に給桑す茲よ於て蠶網二重となる(網上二回の給桑と終らば乃ち其上網一枚を擡げて制籠よ移す自餘の一枚と棘沙とハ爲めに殘留す以後上簇まで裏抜ハ毎日午前一回よして糞筋ハ午後二回とす(以下此扱を記せす)尤も臨機糞筋の回數を増すことあり)午後二時頃に至り炭火ハ概ね使用し盡したるを以て埋火時間を早め直に一貫六百匁の埋火をなす同時天井莚中央を恰好に剝ゞ午後六時頃雨勢稍強きを加ふ本日ハ朝來雨戸は一尺五寸許置に閉ぢ置しが此時に至り全く閉ず午後十一時炭火の掛灰を薄ふし防濕の注意を怠らす降雨終夜止ます

五月廿七日 (自掃立二十七日目)

前夜來降雨尚止ます加ふるに風起りて方位一定せす午前二時東北風なりしが變して東風となる室内ハ前日に倣ひ炭火を利用して防濕の注意を怠らす午前六時頃又北風となり幸にして降雨漸く止み追々快晴に向ふと以て雨戸及高窓を開き天井莚を剝き專ら防濕に注意し空氣の代謝を計る午前九時風向變じて再び東風となり忽よして陰雲天を覆ひ暫時にして又降雨し漸次雨勢を益す依て又高窓及雨戸を閉ぢ雨氣の來襲て遮斷す午前十一時頃に至り覆盆の大雨となる午後一時に至り雨勢衰ふ此際雷鳴あり同二時頃東北の風勢稍強きを加ふ然れとも雨勢愈衰へ微雨となる同四時降雨全く止み追々晴天となる依て又雨戸及高窓を開く暫時の後又曇天となり一時間を經て又大雨降る乃ち急ぎ再び高窓及雨戸を閉ず后小雨となり同六時全く快晴となる即ち又雨戸を開き高窓を半開にす同時殘火を撿し一貫二百匁を増埋す同八時雨戸を閉ず同十一時北風となり夜氣寒冷なるを覺ゆ依て天井莚と蓋ひ火炉掛灰を薄ふし保温よ注

意す十一時半外氣五十五度ょ降るも室内七十三度ゑ保てり本日ハ風雨忽ち歇み忽ち起り變動窮りなく取扱頗る頻繁を極めたり

五月廿八日〔自掃立二十八日目〕

早天快晴なりゑ雖とも西北の和風あり爲めに寒冷なり室内ハ昨夜來火力を利用し來りて七十二度を保てるも尚幾分冷濕に傾かんとし火力も稍減退したるを以て午前二時埋火の掛灰を薄くし火力を高む日中に至り曇天ゑなりしも温度稍昇らんとするを以て高窓を全開にず午前三時北方の疾風あり依て北方高窓を閉ぢ且つ雨戸を細目に閉す又時々雷鳴あり午後六時東北風ゑなり又降雨す此時殘火を撿するも尚七百匁許を存せり然れとも濕氣過剰なるが爲め新ょ一貫九百匁を增埋せり午後八時風止む同時高窓を全閉す同十時頃より追々室内冷濕に傾かんとするを以て掛灰ゑ薄ふし火力を高む終夜雨止まず本日特に糞拔一回を增せり

九月廿九日〔自掃立二十九日目〕

前夜來降雨霏々容易に止むの氣色なし從て室内ハ冷濕の增嵩せんことを恐れ專ら之

れが防濕に注意して怠らず午前二時外氣ハ降て五十度を示せとも室内ハ依然七十二度を保てり午前七時雨止む此際已に蠶兒ハ食慾增進し給桑一回ハ一回より益々生長肥大なるを見る正午ょ至り尚曇天なれとも内外平温にして只防濕の注意をなすれみ午後二時に至り又降雨始まる同六時殘火を撿し新に炭火一貫五百匁を增埋す午後九時降雨止む同十二時外氣五十三度に降りしが室内は尚七十二度を保てり

五月三十日〔自掃立三十日目〕

曇天午前二時室内温度稍下降の傾あるを以て火炉掛灰を薄ふす蠶兒ハ已に成長極度に達せりと認め午前四時其体量を撿せゑょ十頭量平均十一匁一分なりき午前九時頃より降雨す同十時室内冷濕ょ傾くの氣味あり依て尚火力を用ひ濕氣を防禦すること前日に異ならず依之火力を用もること多く加之已に五齡の大食期に入り此際充分飽食せしめされハ成繭の良否に關係あるを以て餌桑の給與も又頗る多量なるのみならず已ょ熟蠶前ょ迫りしを以て其排泄する處の蠶糞も又多量にして且つ柔軟なるょ依り充分蒸熱の防禦に注意し尚特に一回の糞拔を增せり炭火は昨夜來概ね消費しさる

と以て埋火時間を早め午後四時二貫目を埋む夜に入り降雨尚歇まず午後十一時室内寒濕の傾あり依て火炉掛灰を薄くす同十二時雨歇む

五月三十一日　（自掃立三十一日目）

午前二時頃より追々晴天となり之も連日の雨天よて室内未た少しく冷濕の氣味あるを覺ゆ午前四時排氣窓を開放し天井莚を剝ぎ炭火を利用して之れが排除を計る同八時南北床下氣管を開く午前十時頃より追々温度上昇せんとするを以て火炉れ掛灰を厚ふし火勢を減却す同時已に熟蠶の兆あり蠶糞は愈柔軟となれり由て午前糞拔一回を増す午後一時頃よ至り蠶籠中點々熟蠶の現ハるゝを見る午後三時頃より熟蠶續々現ハる乃ち豫て用意の簇一坪に對し凡そ六十頭の割合を以て宿らしむ（其簇の作り方ハ先づ蠶籠よ薄拡を布き之れに荒繩を縦に三條を張り此繩を支ゆる爲め長さ四寸巾二寸許の板片を前後よ狹みて繩を張り詰め之れよ折藁（方言嶋田簇と云ふ）とて粳藁五六十本宛長さ四寸位に七重よ屈折したるものを元より三折目を張繩よ跨がせ三條共よ勉めて厚薄なき樣恰も波動れ如き有樣よ作れるなり）爾後順次拾ひて上簇せしめ午後六時頃に至り全數の四分通り上簇せり同時殘火を撿し新に一貫九百匁を増埋す埋火の後熟蠶を拾ひ終りたる儘午後十時一回の給桑をなし同十一時糞拔をなせり氣候の取扱畧前例に同し

六月一日　（自掃立三十二日目）

朝來晴天にして清涼頗る爽快を覺ふ早天より熟蠶の現ハるべきを以て午前三時給桑を行ふ此際より已に熟蠶現出す依て午前四時より急き拾ひ取りて上簇せしめ直に糞稜を行ひ續て打ち桑をなし再ひ拾ひ始め順次上簇す午前七時未た熟せずして拾ひ殘りたる蠶兒のみを集め十五籠よ減縮し又打ち桑をなし午後四時に至るまて順次三回熟蠶を拾ひて此時僅に四籠よ減縮す同五時一籠半に減ず同六時に至り悉皆上簇を終る今夕又炭火一貫二百匁を増埋す

本日を以て全く本年の飼育を終り以下上簇後の取扱に移る

發育表

（蟻蠶一頭の量一糸）

齡期＼項目	餐桑日數	一頭体量	蟻蠶に對する發育倍數	前齡に對する發育倍數
第一齡	七日間	匁分厘毛糸 〇〇〇一四	十四倍	十四倍
第二齡	五日間	〇〇〇七二	七十二倍	五倍一歩強
第三齡	五日間	〇〇三八四	三百八十四倍	五倍三歩三
第四齡	七日間	〇一八四六	千八百四十六倍	四倍八歩〇六
第五齡	八日間	一一一〇〇	一万一千一百倍	六倍〇歩一

自掃立至熟蠶總計

一飼育日數總計　三十二日
一飼育時間總計　六百〇八時間
一眠中時間總計　百四十二時間
一室內寒暖平均　朝七十二度一　晝七十四度二　夕七十二度八
一室外寒暖平均　朝五十四度五　晝七十一度三　夕六十一度三
一炭量總計　四十七貫四百匁
一桑量總計　百八十九貫四百三十九匁八分四厘
一總桑回數總計　百二十九回

自上簇至燥殺日表

日次	月日	晴雨	華氏寒暖 室內	華氏寒暖 室外	炭火用量
二日	六月二日	曇雨	朝七〇度 晝七四 夕七一	朝五四度 晝六〇 夕五八	午後七時 八百目
三日	六月三日	晴	全七七〇 全七七四	全五二 全七六	午後六時 一貫目
四日	六月四日	曇	全七七〇 全七七三	全六三 全七五	全 一貫目
五日	六月五日	雨	全七七一 全七六三	全六九一 全六五	全 八百目
六日	六月六日	雨	全七七二 全七一四	全六七四 全六八	全 一貫目
七日	六月七日	晴	全七七〇 全七三	全七七五 全七三	全 八百目
八日	六月八日	晴	全七七一 全七七五	全五三 全七〇	全 八百目

一上簇籠數總計　六十三籠

一成繭　貫數十四貫二百二十四匁一分
　　石數一石二斗九升三合一勺

第十四　上簇期

六月二日〔上簇後二日目〕〔上簇後の取扱ハ六月一日上簇の分に就て記載す〕

朝來曇天外温低しと雖とも前夜來火力を利用して適温を保てり午前六時平常雨戸開明の時に至るも上簇の蠶兒結繭中なれば室内明暗不平均ならざるを勉むる爲め南北雨戸を一尺五寸明きに閉ぢ置く午前九時頃より降雨始まり忽に止み忽に降り午後六時頃に至り又降ること少時同八時頃ょ至りて全く止む然れとも火力を利用して防濕の勉めを怠らす今夕炭火一貫百匁を埋む尤も殘火凡そ五百匁を存せり午後十一時外温五十四度に降り室内も從て幾分下降の傾あり依て又火炉掛灰を薄くす〔上簇後注意すべきの要點は第一寒暖の一定第二明暗の平均第三靜肅なるを主とするにあり即ち上簇の當日ハ室内寒暖六十七度以上七十度以下ならんことを欲す此際若し高温なるときハ蠶兒ハ活潑に運動し結繭を急くが爲めょ多數の同功繭(玉繭を云ふ)と作るに至るべし然して熟蠶八九歩通巣隱れんとするを認めば温度を昇せて七十三四度となし決して急劇の變動を受けしむべからす且つ結繭中ハ上簇室内の薄暗きと要す若し明暗不平均なるときハ總て成繭の厚薄或ハ形狀に不齊のものを生すべければ其明暗平均なるを勉むべく加之蠶の性として靜を好み騷を嫌ふ特ょ結繭中ハ些微の音響にも驚愕し吐絲を止め甚しきハ吐絲と絶つの恐れあれは又靜肅なるを勉むべし尚濕氣の過剩は言ふ

迄もなく充分防禦すべきあり（上簇後三日目）午後七時殘火を撿し新に八百目を埋む

六月三日

早天快晴午前二時外氣は五十度に下降せしが前夜來火力を用ひ注意したるか爲め室内は七十度を保てり午前六時頃より漸々温度上昇せんとするを以て火炉掛灰を厚ふし其他の取扱に注意す雨戸は前日の如く之れを細目よ閉ち尚明暗の不平均ならざるを勉めたり午後六時炭火八百目を增埋す尤も殘火五百目許を存せり夜よ入り曇天となる

六月四日（上簇後四日目）

朝來曇天蠶は最早概ね吐絲を了るへきを以て當日は簇に風入と稱して午前第八時地上の水分蒸散し外氣の乾燥なると計り南北雨戸を全開にし高窓は勿論之れを開き室内を明晰ならしむ爾後一層室内の清淨を要するを以て洒掃と怠らす午後に至るも尚曇天にして催雨の兆あり依て同六時殘火を撿し新に一貫匁を增埋す同九時頃より微雨降り十一時頃雨勢强を加ふ火炉掛灰を薄くし防濕よ注意す

六月五日（上簇後五日目）

本朝降雨尚歇ます濕氣の防禦に注意す本日ハ概ね吐絲を盡したりと雖とも未た蛹よ化せさるに先ち劇動を與ふるときハ障害を及ぼすを以て只室内氣候作爲よ注意し濕氣の防禦に盡力するのみ午後二時降雨止み五時頃より又降る同六時埋火を撿するに僅に四百目許を存せり依て更に八百目と增埋す終夜降雨ます

六月六日（上簇後六日目）

前夜來降雨尚歇ます加ふるよ北方微風を送り午前十一時頃漸く止む午後四時頃又起り忽よして風向西方よ變し同時に又晴天となる本日ハ上簇後六日目よして方に繭掻き取りの好時機となす依て午後より掻き取りを初む（掻取し繭ハ八百目宛直よ蠶籠に併列す）午後六時殘火を撿し更に八百目に炭火を增埋す午後十一時頃より寒冷に傾くの氣色あり依て同三十分火炉掛灰を薄くす

六月七日（上簇後七日目）

朝來快晴西北の和風ありて外氣寒冷なり室内ハ前夜來保温よ注意し七十度を保てり

午前九時頃より追々温度上昇せんとするを以て火炉の掛灰を厚くし火勢を減却ス其他の取扱を廻らし清涼を求む當日繭搔き取りと終ると同時ヨ繭撰秡を初むこれ繭搔きの際ハ上繭玉繭等を一所に搔き入れ置くを以て其撰秡を行ふヨ右等を撰り別け繭蛹燥殺の時期來るを待つ午後六時殘火を檢し八百目と增埋す夜に入りての注意畧前夜に同し

六月八日〔上簇後八日目〕

搔取後第二日目本日も快晴午前八時頃より温度漸昇せんとするを以て豫て室内の清冷ヨ注意す午後三時頃に至り東方の和風起り薄曇となる暫時にして風向變じて西北風となり又晴天となる午後六時殘火を檢し八百目を埋む〔平常の年柄ヨ於てハ繭蛹燥殺を行ふハ本日即ち上簇ヨり八日目を以て適當とす然れとも本年ハ平年ヨ比すれば上簇中雨天の日多くして特に外氣寒冷勝なりしと以て一日を延長し明日を以て燥殺を行ふ之れを行ふことと早きに過ぐれハ蛹未だ熟せすして其若きに失し燥度充分ならす遲きに失すれバ蛾に變化するの害多かるべきを恐るゝか故宜しく其年の氣候寒暖ヨより好機を矢せざるを勉むべし又搔取後炭火を利用して氣候を作爲するハ或ハ種繭にあらざれば無用なりとの感を抱くものゝあらんが決して不然若し濕氣の來

襲あるときハ繭を害する不尠を以て燥殺を終る迄〕ハ氣候を作爲し始終室内をして乾燥ならしむべし〕

六月九日〔上簇後九日目〕

搔取三日目午前五時より繭蛹燥殺を始む其方法前出依て茲ヨ畧す

第十五　附記

本年度飼育中木炭消費の高平年に比して頗る其多量なるを見る之れ即ち本年の氣候ハ概して平年より寒冷なりしのみならす雨天或ハ曇天等の日多く爲めヨ室内も冷濕ヨ傾くゝ之れに反するときハ蒸熱の氣を釀さんとすること屢々なりし特に三眠後ハ甚しとす氣候適順にして乾燥の年柄に於てハ大眠後ハ火氣を廢するの日多しと雖も本年度ハ前記する處の如き氣候なりしか爲め徹頭徹尾一日も炭火を廢したるのなし依之如斯多量を要したるものなり若し斯る氣候ハ際し徒らヨ木炭ハ消費を惜み眼前の小利ヨ眩み炭火を利用せさるに於てハ却て不良の結果を來し木炭の消費額に幾百十倍するの損耗と來すや知るへからす宜しく斯る年柄ヨ於てハ適度に火力を利用し養蠶上最も忌むへき寒冷を避け濕潤蒸熱等ハ氣ハ悪く排除し空氣の流通代謝を

可ならしむへし而して飼育に注意せは好結果ハ得て望むへきなり然るよ一利あれは一害の生するハ免れさるの數よして火力を利用すれは從て生する炭酸瓦斯ハ蠶兒よ大害を與ふるものなれハ徒らよ火力を用ゐべしとて之れよ應する排氣の個所乏しく或ハ周圍天井等密閉したる室内に用ゆるに於てハ却て用ひさるに勝れる失敗を招くものなれハ宜しく之れを用ゐると同時に腐陳れ氣ハ室外よ排除し新鮮の空氣之れに代り室内ハ勿論蠶坐にも冷濕或ハ蒸熱の起らさる樣注意すれハ安全なるべし最も前記の木炭總量ハ六坪七合の蠶室内よ使用したるものよ之て此一室内にハ蟻量拾匁許りを飼育之得らるへけれハ本表蟻量四匁に對する割合と其半量にも及ハさるなり

木村九藏氏養蠶傳習場春蠶白玉飼育日表終

群馬縣立図書館

豐餘商標

印艦軍

授業時間割

日/時	月	火	水	木	金	土
一時						
二時						
三時						
四時						
五時						
六時						

（雜貨文房具用品店）

群馬県立図書館
0238147-3